



1月の作品「桃山」(35cm x 35cm)

作者: 梶谷敬子(ソフィアズキルトソサエティ講師)

製作意図: 1月の季節感をだせるよう和風のパターンに挑戦してみました

ソフィアズキルトソサエティの概要

キルトを作るのが好きだったり、見るのが好きだったりといくらかでもキルトに興味をもっているソフィアン達が集まって始めた会です。ただ漠然とキルトを作っているよりは、ソフィアンとして何らかの社会貢献ができれば、キルト作りもより楽しく励みがでるのではという考えの基、寄付を目的とした作品製作を主なテーマとしています。

具体的には、メンバー達が製作した作品をソフィア会主催のバザーに出したり、オールソフィアズの集いで行われるオークションにかけてその収益をなんらかの社会団体に寄付をしたり、といった形での社会貢献を目指しています。もちろんメンバー達が楽しむことも大事です。卒業後顔を合わせる機会が減ってしまった同窓生同士、気軽に集まって情報交換しながら、講師の先生を囲んで和やかに活動しています。



2月の作品「Sunshine and Shadow」(88.5cm x 88.5cm)

作者: 梶谷敬子

製作意図: 憧れだったアーミッシュキルトの大作に挑戦してみました。題名の「光と影」ということで、
暗い冬に別れを告げて明るい春を待ちわびる2月の作品としてみました。



ソフィアンズキルトソサエティの皆さん 毎月定期的にソフィアンズクラブに集まっています。



3月の作品「Windblown Tulips」(風に吹かれたチューリップ) (117cm x 117cm)

作者: 吉田 緑(1979 外英)

制作意図:

1920年代に流行った Marie D. Webster の人気パターン。
図版の中で偶然見つけて 8x8cm の写真から型紙をおこしタペストリーサイズに再現した作品。
(オリジナルはベッドカヴァ)



Welcome to the Sophians' Quilt Society!

1月からソフィアーズギャラリーに作品を掲載させていただき、メンバー一同、製作に一段と力が入っております。これから一年間をとおして、私達の活動の一コマやキルトについての豆知識などを作品とともにご紹介したいと思います。今月はまず2月のテーマであったアーミッシュキルトを作った人々についてお話ししましょう。(吉田 緑)

Amish(アーミッシュ)について

1693年に、スイスのヤコブ・アマン司教により始められたアナバプティスト派から分かれた一派です。ヨーロッパで厳しい迫害にあい、18世紀半ばに、米国ペンシルバニア州への移住が始まり、徐々にオハイオ州、インディアナ州と中西部に向けて、独自のコミュニティを展開してきました。今日に至っても、近代文明を拒み、電気、電話、車等を使わず昔ながらの生活をしようとしています。生活の中心は信仰とコミュニティの中で定められた規律で、静かで簡素をモットーとした暮らしです。

Lancaster で(撮影: 吉田緑)



キルトの特徴は、柄物の服の着用は禁じられている人々故に、無地布のみを使った幾何学模様中心で、大胆で鮮やかな色のコントラストが目立つ物が多い。キルト以外の一切の装飾品を許されなかった人々の美的な欲求とエネルギーが、限られた条件の下で花開いたような、インパクトのある美しい品に仕上がっています。先月の作品「Sunshine & Shadow」も Amish の代表的なパターンの一つ。



4月の作品「レッスンバッグ」(スクールハウス) (38cm x 28cm 本体部分)

作者: 内藤みさ子 (1978 外英)

製作意図: 4月はスタートの季節。幼稚園や小学校、習い事にも活躍してくれそうなバッグを作ってみました。
大きめのポケットには、ハウスのパターンでアップリケをしてあります。

5月30日(日)のASFまで2ヶ月、4月を迎えると毎年、バザーの準備に大忙しとなります。まずは、何を作るか、次に買い出し、材料がそろったところで普段のレッスンはひとまずお休みにして全員で切ったり、縫ったり、ソフィアンズクラブのテーブルの上は家内工業のアトリエのような分業体制となります。今年も楽しい企画がたくさんあります。来月には写真と共にご紹介できると思います。楽しみにしていてください。キルトについては、3月と4月の作品に見られるアップリケキルトについて少しお話ししましょう。(吉田 緑)

アップリケキルトについて

台布に表現したい図柄の布を重ねてアップリケにしたキルトをアップリケキルトと言います。フェルトのアップリケと違ってふつうの布はほつれますので縫いしろを中におり込んで目立たないようにたてまつりというまつりぬいで縫いつけていきます。大抵の形は、作りたい



形を布の裏に書きヘラでその線をもう一度強く押すと縫いしろが自然と立ち上がるので、その線を利用して中におり込んで縫い付けます。場合によっては、切り込みを入れると美しく仕上がります。

アップリケキルトは装飾性が高いので、歴史的には古くは教会のタペストリーや客用のベッドカバー等、“見せる”事を中心に考えたキルトとして発達してきました。パッチワークキルトと呼ばれる残り布や小布をつなぎ合わせたキルトが物資の乏しい時代に生活の中で必需品として作られ続けた歴史とは対照的に思えます。

例えば、南部のプランテーションで成功したボルティモアの富豪達が人を雇ってデザインさせ作らせた美しいボルティモアキルトはアップリケキルトの代表として残されています。又、もう少し前の時代ではチンツと呼ばれる東洋のエキゾチックな布は、ある時期、ヨーロッパでもアメリカでも高価な輸入品でした。その布を全面に使わず、モチーフのみを切り抜いて別の土台布にアップリケして新しいデザインのキルトがたくさん作られました。そこには、人々の美を追求する心のみでなく、高い布を持っているぞという虚栄心と、高い布を活かし切るぞという心意気が伺えます。ハワイで有名なハワイアンキルトも装飾性の強いアップリケキルトの代表作です。美しい図柄が求められたもので、開拓時代のニューイングランドや中西部の寒々とした丸太小屋の中で暖を求める為に何枚も作られたキルトとは性格が異なっていて当然です。

アップリケキルトは描きたいデザインを自由に描き切ることのできる特性をもっています。3月の作品は、ダッチモチーフと呼ばれるチューリップという題材と同じく風車のイメージを重ねて作られたデザインで、幾つもの同じパターンをくり返すことでリズムが生まれ、あたたかも風に吹かれているかのようなイメージが仕掛けられます。4月の作品は、スクールハウスというパターンを簡略化した物ですが、逆に1つだけアップリケすることによって、ハウスを中心にしたストーリーが生まれます。このようにアップリケキルトという手法によって作者が思い描くイメージができるだけ忠実に布の上に再現されていきます。



5月の作品「バリエブルスター」(38.5cm x 38.5cm)

作者: 村井万里(1979 外英)

バリエブルスターとナインパッチを組み合わせて作りました。

製作意図: 全くの初心者で入会し、手取り足取り教えていただきながら完成させた一作目のキルトです。

キルトひとくち講座: 割と簡単に作れて、楽しく使える鍋つかみの作り方をご紹介します



作って楽しく、毎日使えるからもっと楽しい鍋つかみ。

みんなで作って、「オールソフィアの集い」のパザールにたくさん出品します。

ぜひおいでください。

キルトソサエティーの活動のご紹介もかねて、つくる手順を簡単に。



カットしたキルト芯 2 枚 + 表布裏布を重ねる。



型紙に合わせてミシンで 4 枚を縫う。



キルト芯をまず、縫い目ぎりぎりに切り落とし、



次に布 1 センチの縫い代をつけて切り落とし、



切り込みを入れる。



角に気をつけて中表をひっくり返す。



ちょっとしたコツがあります。



慣れてくれば難しくはありませんが...



で、こうなります。これで一応形ができました。
これから後は仕上げの工程に進みます。



まず、返し口でまつり縫いをする。



リボンをはさんで、



半分まで裏からまきかがりで縫う。



ま、こんな具合に。



ひっくり返して、



出来上がり。



この日もまたみんなで、手は休めず、おしゃべりも休まず...



バザーのために、いろいろな作品をたくさん作ってます。



バザーで売り易い物として私達が考えた事は、あまり値が張らない事、買ったその日から使える物、みんなでたくさん作れるもの等でした。

我が家には、10年以上使っても捨てられない使い心地のよい鍋つかみがありました。友人がイタリア土産でもらったシェルの鍋つかみを洗ったところ、いっぺんに壊れてしまって、でもあまりの使いやすさに諦めきれずバラバラにして型紙を取り直して、似たような形の物を作ってプレゼントしてくれたものでした。ついでにすごく簡単だからといって自作の型紙も送ってくれました。恥ずかしながら毎日のように使って、汚れては洗濯機で洗い、新しい物を作りなおせばいいものを、なぜか壊れないので、少々たびれてきてもずっとずっと使っていました。



働き者です まだ現役！

キルターとしては、あまりミシンを使わず、町中で売っているマシンメイドの物と一線を画した品々をバザーで提供したかったのですが、作る自己満足よりも使ってもらい楽しみ、飾る物よりも役に立つもの—そんなコンセプトも一部必要かと思って2年前から春に秋にと作り始めました。

最初は会員の不要になった布を表裏合わせてコストを下げて売りました。飛ぶように売れました。次の機会からは、使う側に立つと、ふだんキルトに使っているより少し厚い布の方が使い易いとわかり、美しいプロバンス柄やチャイナシーズの布等、インテリアクロスを使って作ってみました。見た目の美しさも重なってあっという間に売り切れ、その次からはリピーターから事前に予約注文を頂くようになりました。好評でした。買われた方からは、プレゼントに最適、土鍋用に一つ別にいただいたとか、電子レンジの横にぶら下げているetc、と当初思った用途以上にいろいろと役に立っているとわれ、作った私達はとても幸せでした。

そんなこんなで、今年もバザーと言えば”鍋つかみ”です。一部はミシンも使いますが、100も同じ物を作ろうと思うと大変な作業です。SQSの鍋つかみがどのような手順で作られていくかをご紹介します。



6月の作品「ポストージスタンプのバスケット」(85cm x 85cm)

作者: 藤山 緑(1981 外ポ)

ポストージスタンプのパターンを習ったので、

製作意図: 初夏に向けた色合いでフラワーバスケットをイメージしたタペストリーに挑戦してみました。

柄物生地を組み合わせを楽しみながら作ることができました。

《オールソフィアンの集い》のご報告

ASFの当日には、大変多くの方々にお越し頂き有難うございました。

毎年この日は、私達メンバーにとっては楽しいお祭りのような一日で、

ピアノの発表会と縁日とバザーと一緒にやってきたような日です。ソ実

の学生さん達に『やけにオバさん達が楽しそうだった』とコメントされたり。

訪ねてくれた旧友とのミニ同窓会だったり、新しい出会いの場であった



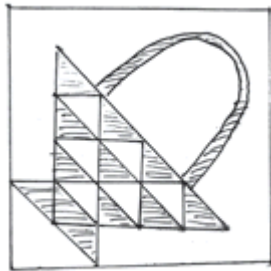
り、和やかな雰囲気のうちにあつという間の 4 時間です。

お陰さまで用意したバザーの品々は、お菓子も含めてほとんど売り切ることができました。売り上げの総額から材料費と経費を除いた 51,850 円をソフィア会の寄付先(→詳しくはこちら)へ回すことができます。ひとえに皆様の温かい御理解と御支援の賜物とメンバー一同理解し、ここに深く御礼申し上げます。秋にもソフィアンズクラブのバザーに参加しておりますので是非お立ち寄り下さい。

吉田緑(1979 外英)

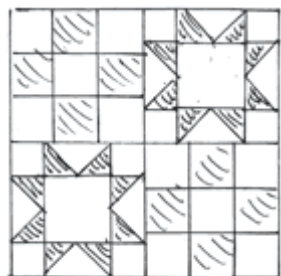
キルトのパターンについて

パターンと言うのはもともと型紙という意味ですが、キルトの世界では図案の事を言います。キルトには、先日お話したアップリケキルトのほかに三角や四角で構成したあるパターンをブロックごとに使ったものがよく作られます。ブロックというのはハワイアンキルト(7月にご紹介する予定)のように一枚布に大きな図柄を描くのではなく、通常ハンカチ大の四角のなかに表現したいパターンなり、アップリケのモチーフをいれるのですが、その一つ一つの四角をブロックとよびます。



Basket

今月の作品はバスケットのパターンで構成されています。もともとのレッスンはポステージスタンプという別名 four little baskets と呼ばれている小さなバスケットが 4 こ向かい合っただけのパターンでした。このようにもう一度構成し直すことで新しい作者独自の作品になっています。バスケットの形を縫い上げる時の型紙は同じなので基本をマスターすればいかようにもできます。これがキルトのパターンの面白いところです。



Variable Star (変光星)
と 9 patch

5月の作品はバリエブルスターとナインパッチを組み合わせた作品ですが、これも一つ一つのパーツは単純な四角や三角の小布です。これらのパターンはその小布を縦なり横なりにどんどん縫い合わせてひとつのブロックをつくる pieced work もしくは patchwork と呼ばれる手法で慣れれば小さな子供からお年寄りまで誰でもできる手法です。残り布を使うのにぴったりの手法でもあります。バスケットはこれに比べると持ち手の部分がアップリケになっているので少し上級編です。



アメリカ人はパターンに名前をつけるのが好きでざっと形だけで分類すると 300 以上あると言われるパターンにそのアレンジ編も含めると 3,000 以上の名前がついていると言われています。もちろん、同じ形に地域、コミュニティによって異なった幾つもの名前もあって、名前を聞くと歴史的な生活観や自然観、宗教観等伺い知ることがたくさんあり面白いものです。

お教室では、2、3ヶ月に一度、パターンだけのレッスンをしています。会員の目標は様々なパターンのブロック(キルトの世界ではサンプラーと呼びます)をいつの日かたくさんつないで大きなサンプラーキルトを作ることです。



7月の作品「ハワイアンキルト」(79cm x 79cm)

作者: 吉田 緑(1979 外英)

製作意図: ハワイの白い波と空にシルエットで映ったパームツリー(椰子の木)をイメージして濃紺のむら染め布を選んで作りました。



ハワイアンキルトについて

ハワイアンキルトは、ヨーロッパやアメリカの伝統的キルトとは、異なった幾つかの特徴を持っています。

ハワイには、1778年に英国の探検家、ジェームズ・クックにより発見され、西洋の人々の文化の影響を受けるようになるまで、布の文化はもともとなく、kapa と呼ばれる木の樹皮をたたいたもので衣類や寝具を作っていました。

1820年にボストンから出たアメリカ人宣教師一行が訪れた際に、その夫人達が出迎えたカラクア女王達ハワイ側の婦人達に船上でお裁縫を教えた事が、布を針と糸で縫う事を伝えた始まりだと言われています。

当然、ポストニアンが教えた技術は、アメリカ本土の東部や中西部で作られていた古い布や残り布をはぎ合わせたパッチワークキルトだったでしょうが、ハワイ自身に布の文化がなかった為、伝統的パッチワークキルトは根付かなかったようです。

代わりに伝えられている伝説は、木陰に干してあった白いシーツに大きく影をおとしたレファの木(一説によれば、パンの木)のシルエットを見てデザインが浮かび、キルトにしたら今のような土台布に大きな一枚布のモチーフが縫い付けられた典型的なハワイアンキルトが生まれたという話です。

布については、昔の宣教師の夫人の記録を見ると、新しい土地に家や教会を建てたり、彼等のために働いてくれる使用人に報酬として与える為に布を送ってほしいと本土に書かれた手紙があったりします。布は確実に人々に受け入れられ、やがてkapaの生産が衰退していきます。その中で、ハワイの人々のおおらか性格とその風土故にその貴重な新しい布を切り刻むよりは、大きな布のうえに大胆な自然のモチーフをデザインして作るハワイアンキルトの手法が発達していったのでしょう。

前にもお話したように、気候的にも寒さしのぎに何枚も重ねて使用する目的でつくられたのではなく、多分に装飾的な意味で作られてきました。

作り方も特徴的で、切り紙細工の要領で四角い布を1/4もしくは1/8に折り畳んで描きたいモチーフを書き、重ねたまま切って開くと私達が見慣れた左右上下対称のハワイアンのパターンになります。

これを土台布にアップリケし、その上からモチーフにあったキルトラインをいれます。モチーフの外側には、これもハワイアン独特のエコーキルトと呼ばれるモチーフの輪郭線をそのまま拡大した曲線が波のように繰り返し入れられ、モチーフの形を美しく強調していきます。エコーとは木霊の意味です。

色についても通常土台とモチーフの単色二色使いでパッチワークキルトのように様々な柄物の布を組み合わせたりはしません。

ここで余談になりますが、ハワイアンキルトはキルトという手法は外から伝えられたものですが、今では、立派なハワイを代表する伝統文化で、色々なタブーやマナーがあるようです。

例えば、モチーフはハワイの自然のなかで見られる花や木が多いのですが、人間や動物は魂が宿るからダメ(最近では、イルカや亀のデザインは人気でよく作られますが)とか、あるそうです。

又、型紙についても単色二色の作品ですから、非常に大切にされ、キャシー中島さんのように親戚から遺産として分けられたりするくらいですから、人のデザインの盗用をひどく嫌うようです。

7月の作品も実は、ハワイアンドリームと言うところで昨年私がお稽古をしていた時の先生のデザインで作られた同じお教室の方の作品がオリジナルでした。実際には雑誌に型紙付で掲載されていたのですが、アレンジ(波を加えてみました)して私が作り直す際には、先生にも許可を頂き、また、もとの作者の方にもその旨を伝えてもらってから作り始めました。たかがキルトされどキルト、それだけデザイン性の高いアートに近い存在なのでしょう。

このように、ハワイと言う島々に伝えられたキルトは独自の特徴をもった新しい一つの文化として発展してきました。ハワイに行く機会がある方は是非本場でダイナミックでハワイの自然を思いきり描き切った作品に触れてみて下さい。その良さはその土地で味わうのが一番でしょうから。



8月の作品「ログキャビンのタペストリー」(77.5cm x 77.5cm)

作者: 忍田恵子(1978 外英)

製作意図: 濃淡をはっきりさせて、模様にしてあります。長いこと壁に掛けていたので、濃い色の布が色あせてしまいました。

Welcome to the Sophians' Quilt Society!

夏休みはいかがお過ごしですか？私達ソフィアンズキルトソサイエティは例年8月は休会してきましたが、今年は毎週木曜日都合のつくメンバーだけ集まって仕事をしています。というのは会創設5年目にしてベビーキルトという大作に挑戦する事になりました。標準サイズでハートのアップリケを24枚、フォーパッチ(小さな四角を4枚つなげて大きな四



角にしたもの)を25枚とりあえず作って、縫い合わせる作業が夏休みの宿題になっていますので、どうせ作るなら、涼しいソフィアンズクラブでおしゃべりしながら楽しくやりましょうという事になりました。

レッスンはお休みですが集まりたい人だけ来て一緒にキルトをするーだんだんキルト教室ではなくキルターの世界になってきたようでわくわくしています。これも同窓が集まって一緒に要る時間が楽しくて仕方がないという本来私達がこの会に求めてきたものが実現しつつあるからだと自負しております。

つけくわえて申しますと、もう一つの目的であるチャリティーの方も頑張っています。同じデザインのベビーキルトを二枚、レッスンにさかのぼって注文を頂き、一枚はすでに納品し7月13日に生まれたばかりのベビーちゃんにプレゼントとして注文主から送られました。また、もう一枚は9月にうまれる方の為に製作中です。こちらもお友達数人からのプレゼント用として依頼を受けました。

これまでにバザーの為に生活に役立ちそうな小物をたくさん手掛けてきましたが、この世に生を受け、後光がささんばかりのベビーちゃんの為におくるみを作るお手伝いができる事はとても神性な気がいたしますし、光栄です。作りながら新しい命の誕生が楽しみです、エネルギーを貰うような気持ちになります。そのうち画面で本物をご紹介できるようになるとと思いますが、どんな様子で作られているか実際に御覧になりたい方はどうかソフィアンズクラブをお訪ね下さい。

吉田 緑(1979 外英)



9月の作品「Sue with Flowersのパネル」(29cm x 21cm)

作者: ソフィアンズキルトメンバー(共同作品)

デザインも含めてリレーのように一つ一つの作業を分担してメンバーが協力して仕上げました。

製作意図: お稽古バッグのポケットの為のパネルです。

詳しくは下記 [Welcome to the Sophians' Quilt Society](#) をご覧下さい。

Welcome to the Sophians' Quilt Society!

暑い暑い夏が終わろうとしています。9月、新学期のスタートです。

私達ソフィアンズキルトソサイエティーもこの季節から本格的に11月のバザーに向けて仕事を開始します。前にもお話したように、この団体は寄付を目的にした集まりですので年に2回のバザーの売り上げが主な寄付金となります。他に最近増えているのがオーダー作品の売り上げ金からの寄付です。

例えば先月お話したベビーキルトもオーダーで動いて作っている作品の一つです。今月の作品の Sue with Flowers のパネルも実はお稽古バッグの注文を受けて作りはじめました。ウサギのモチーフでという事で皆でウサギのパターンを



考えましたが、パネル全体をうめるだけのアイデアが浮かびませんでした。どうやら主役にするには私達のデザイン能力では無理かと思い、習い立ての Sue のモチーフをまずアップリケし、次に花かごをアップリケと刺繍で描きました。

ここで作者をバトンタッチし、空いたスペースになんとかウサギと景色をお願いします！と刺繍の達人に未来をゆだねました。出来上がってきた作品は一同歓声があがる程の物でした。雰囲気や全く壊さない見事な遠景もお花の刺繍も図書館通いをしてモチーフを探したそうです。一番困ったのはやはりウサギでウサギフリークの友人にモチーフを頂いたそうです。

最後にパネルに仕立てる為に私の手元に戻った時、ウサギもさる事ながら Sue の手に描かれた花の美しさに題を「Sue with Flowers」とし、文字を付け加えパネルに仕立てました。

ここからはまた袋縫の達人の手にゆだねられ、ていねいに縫い上げられた定番のお稽古バッグのポケットに張られました。さらに名入れ係の元に渡されお名前の刺繍を内側に入れて納品されました。まるでリレーのように何人もの手を渡って仕上がったのがこの作品です。

このように9月の作品は小さなパネルではありますが？皆が知恵を絞り、愛情を持ってデザインされ縫い上げられた私達一同にとって心に残る一枚となりました。プロのデザイナーやキルター集団ではないからこそできた世界で一枚だけのパネルです。

納品してしまうのが惜しいといったら申し訳ないのですが、お嫁に出す気分で8月のある日注文先にお送りしました。今頃は新学期の机の横に自慢気にかけている事と思います。大変気に入って頂いたようで、新たな注文もうけています。私達とはといえば、物作りを通して寄付のみでなくいいチャンスを頂いた気分です。

吉田 緑(1979 外英)



10月の作品「かぼちゃ」(13 x 16 x 16cm ~ 9 x 13 x 12cm)

作者: ソフィアンズキルトメンバー(共同作品)

ハロウィーンを意識して、あえてオレンジかぼちゃにしました。

製作意図: 大小二種類の型紙を頂いて作ったのですが、小さい方が立体に仕立てる時にとても苦心しました。

たくさん並べられた姿を見るとハロウィーンよりも
アメリカの田舎の農場の出店(Farmers market)を思い出します。

Welcome to the Sophians' Quilt Society!

10月、収穫の季節、夏の太陽をいっぱいを受けた果物や野菜が各地から届く頃となりました。秋はなんて素敵な季節なんでしょう。画面のカボチャは3年前の秋に皆で習って作った作品で、毎年ハロウィーンに向けて各家庭の玄関やリビングを飾る10月の顔です。

キルトのカレンダーはいつも半年先を見ているといたら少々大袈裟ですが、9月に入ってすぐ始める事は、実は今年のクリスマスには何を作ろうかであり、その為の布地さがしです。パリ・コレと同じで、布屋の世界では本当に半年前にクリスマス用の新しい布の展開が始まり、夏の終わりには店を飾り、10月には何処かのキルトの膝の上で縫い始められている——そんな感じですよ。

私達、ソフィアンズキルトソサイエティはさらに忙しく、11月のバザーに向けてのプランニングと製作、これと同時進行で今の時期にクリスマス用の布を買い込み、少々出遅れてしまうのですが、バザー明けに一気に自分達の今年のクリスマスキルトの製作に入ります。今年は9月中に先生からお見本を見せて頂き、それぞれが自分の納得いく生地を探しに街の布屋を回ったり、手持ちの布のストックをひっくり返しています。これも、キルターにとってはわくわくする瞬間で、たくさん迷いはするのですが、前奏曲のようなものです

制作した皆さん

梶谷敬子(講師)

根本裕子(1978年文英)

内藤みさ子(1978年外英)

大塚朝美(1979年外英)

吉田緑(1979年外英)

藤山緑(1981年外ポ)



石地由美子(1986年外英)

収穫に追われる農夫ではないのですが、この季節に一つ一つ片付けて行かなければならない仕事がたくさんあるというのは、とても張りのある毎日です。"fruitful"という言葉のように私達キルターにとっては、バザーでお売りするキルトも、自宅のハロウィーンやクリスマス、お正月と続く季節行事に彩りを添えるキルトも、"実り多き秋"を象徴する収穫のようなものだと思ったりもします。丹精込めて一針一針仕上げて行く作業はすべての物作りに通じる完成した時の喜びを作り手に必ず与えてくれます。

ソフィアンズクラブのバザーは11月11日(11:00 a.m.~)です。10月はお稽古を休んで完全にバザー用のキルトの製作に入っています。どうか私達の"実り"を手に入れにバザーにお越し下さい。

吉田 緑(1979年外英)



11月の作品「ハートとフォーパッチのキルト」(86 x 86cm)

作者: 山本千代子(1977 文英)

製作意図: 私の母が今年喜寿を迎えるので、ひざ掛けをプレゼントしようとおもい、落ち着いた爽やかな色どりで作成しました。小さなハートの中に、[2004.77]の文字を刺繍してお祝いしたいと思っています。

11月11日のバザーで是非私達のキルトに触れてみて下さい。心よりお待ちしております。

Welcome to the Sophians' Quilt Society!

早いものでギャラリーにキルトを載せて頂き始めて10ヶ月あまり。今回は2000年から2002年にかけて皆で作ったチャリテイ・キルトについてお話ししよう。

私達 Sophians' Quilt Society は 2000 年のオールソフィアンズフェスティバル (ASF) の参加企画の一つである雑学大学から生まれた、チャリティ活動とキルトレッスンをする為の団体です。この 5 年間、同窓の皆様やそのご家族、友人達と共にキルト作りを通してどうチャリティに協力していけるかを常に考えながら活動してきました。

2001 年の ASF ではフィナーレのオークションに何枚かのキルトを寄付しました。また、Sophians' Quilt Society の展示室ではナインパッチと呼ばれる 9 枚の正方形を繋いだピースの製作を来訪者に呼び掛け、一緒に作って寄付して頂きました。また縫えない方でも、志のある方には会員がすでに縫上げたピースに御名前をサインする事で寄付をお願いする等して、目指すチャリティ・キルトのベッドカヴァーのピースを集めました。

予想していた以上に多くの方々が布の上にサインをして 100 円玉を募金箱に入れて下さいました。集めたお金はその年の終わりに WFP (世界食糧計画) へ他の売りあげと共に送られました。皆様がサインをして投じた 100 円玉がアフガンの難民の食糧になったわけです。



2002 年の ASF ではこれらのナインパッチのピースを 420 枚つなげて、上の写真のような見事なベッドカヴァーを作り、皆様にご披露し、買い手を募りました。カーリー学長を初め、色々な方々にサインを頂き、そのたびに寄付金を集めたこのキルトは 2002 年の終わりにご縁のあった台湾の親日家にお買い上げ頂きました。買われた方はインターネットで見た写真を頼りに申し込まれて来日されたのですが丁寧な仕上がりとそのキルトが意味した事に大変満足され、今度作ったら、又、声をかけて欲しいと言われ残されて帰国されました。

この作品の材料費はすべて Sophians' Quilt Society 負担とし、売り上げ金全額をスペシャルオリンピック日本への寄付金に加えて頂きました。大きな作品を作るのは多くの時間と労力がかかる大変な仕事でした。さらにそのキルトを活かしてくれる購入先を見つけるのは一見簡単そうですが、実はより難しい仕事でした。今、海を越えた外国で私達が作ったキルトが重宝され使われていると思うと苦労した甲斐があったと結果的に思います。

その後は、徐々に会員数も増えて、バザーに出展する作品の数も増えました。今秋のソフィアンズクラブのバザーにも 100 点以上の作品を出展する予定です。少々大きなものについてはオーダーベースとし、随時注文を受けては製作し納品していきます。

今日ご紹介したベッドカバーは、私達キルターの夢を実現したお金の集め方ができた Sophians' Quilt Society が誇る第一号のチャリティ・キルトでした。布の大半は持ち寄りの残り布で、ピースは誰でも縫える代表的なナインパッチを選びました。皆が少しずつ協力して布を繋ぎ、寄付を募り、名前を記し志を布に残し、又、寄付を集める。時間をかけてゆっくりと丁寧にベッドカバーに仕立て、又、人々に呼び掛け買い手を募り、望まれて海を渡ったキルト。買い主も手に入れて幸せの笑顔、私達作り手も大きな仕事を終えたと言う満たされた気持ち。どんな作品展のどんな立派な美しすぎる作品よりもシンプルで分りやすい...つまり、明日から誰かのベッドの上にかかけられ確実に使われるキルト。これこそがキルトの本来あるべき姿、キルトの原点であると信じています。この企画を始めて3年、私達の思いが実現したキルトでした。

正直言って、キルトは縫い上がったものの、買い手が見つからなかった当時は、このまま、私達のFlagにしていまいたいとその愛着故に思った事もありました。今手元には写真しか残っていないこのキルトが私達の原点でもあった気がします。又、いつか、この趣旨をご理解頂ける方と巡り会えば、皆で大きなキルト作りに挑戦したいと一同心より思っております。



まずは、11月11日のバザーで是非私達のキルトに触れてみて下さい。心よりお待ちしております。上の写真は出品作品の一部です。左から、キルトのクリスマスソックス、おけいこバッグ、タペストリー、刺子のおふきん。

吉田 緑(1979 外英)



12月の作品「ツリーインツリー」(35cm(H) x 28cm(W) ~ 32cm(H) x 25(W)cm)

作者: 梶谷敬子(講師)、杉山和子(1978 外英)、忍田恵子(1978 外英)、内藤みさ子(1978 外英)、根本裕子(1978 英文)、村井万里(1979 外英)、吉田緑(1979 外英)、藤山緑(1981 外葡)、松本浩恵(1983 文史)、岸本恵美(1986 外葡)

製作意図: ツリーインツリーと名づけ、大きな木の中に小さな木がある騙し絵のような遊び心を表現しました。
この季節は赤と緑を目にするだけで幸せな気分になれます。

Welcome to the Sophians' Quilt Society!

12月、年の瀬とクリスマスを迎えて皆様いかがお過ごしでしょうか？お礼が遅くなりましたが、11月のバザーの日には、たくさんの方々にお訪ね頂き誠に有難うございました。

お陰さまで今年は例年にないほどたくさんの方々のキルトと春のASFで大変好評でしたラターブルの仏菓子を用意させて頂きましたが2時すぎにはほぼ完売状態でした。11時の開門を待って並んでお待ち頂いたご常連さまを始め、お立ち寄り頂いた方々には、この会の趣旨をご理解頂いた上で、



品物を手にして頂き、御寄付を快くして頂きました。先日、売り上げから会の規定に従って 87,825 円をソフィア会の今年の寄付に加えて頂きました。ここであらためて重ねて御礼申し上げます。

1月から掲載させて頂きました Sophians' Gallery も今月で終了となります。1年を通して、このコーナーがありました為に、いっつになく、あれもやってみたい、これもやってみたいと思う事の多い充実した日々でした。

もともと趣味を通じて集まったキルターと言っても先生以外は素人の団体です。実際縫うのもおけいこですから、通常はひとつひとつ教えてもらってぼちぼちマイペースにがモットーの会ですので、会員もがんばりましたが、締め切りまでに写真をお願いしたり、文章やカットを送って頂いたり、事務局の方達やホームページの御担当の方のお力添えがなければ何も成し得なかったと思います。皆様のご協力があつてこそ、12ヶ月、私達の作品と会の活動についてご紹介できたと心から思っております。この場を借りて御礼申し上げます。

Gallery からは姿を消しますが、SQS は毎月第3木曜日にソフィアンズクラブでおけいこをしていますし、来年の ASF にも参加する予定です。又、秋が巡ってくればソフィアンズクラブのバザーで声を張り上げて季節を感じる作品を売るつもりです。寄付の額にしたら微々たるものかも知れませんが、同じキルトが好きでキルトを作るなら、その楽しみの中から少しでも社会に還元できるものを作ってみなでちょっとだけ胸を張ろう、胸を張りながら好きな事を気の許せる仲間と心行くまでしていきたい。この精神はソフィアンだから実現したものだと自負しています。又、その趣旨を理解して大学まで足を運んでまで寄付に協力しようという温かい御支援もソフィアンならではの物だと受け止めております。そんな私達に触れなくなったら、いつでもクラブをお訪ね下さい。作品に興味があれば、是非5月の ASF に。御買い物でしたければ11月のバザーに。いつでも Welcome です。

最後になりましたが、今月の作品の作者達にこの会についてとこの作品についてのコメントを貰いました。これは、会員の生の声ですので、『この会を知る』の最後にご紹介したいと思います。1年間、ご拝読有難うございました。吉田 緑(1979 外英)

このキルトは去年の作品で、雪山にモミの木を切り出しに行くワクワクした気持ちをイメージして、土台の布を白にしてみました。寂しい配色にならないように、緑の布はなるべく赤の多く入っている部分を選びました。植木鉢の所には2003年と金糸で刺繍してありますが、これから毎年一枚ずつクリスマス・キルトが増えて行くのを楽しみにしています。このツリー・イン・ツリーのキルト一つを取ってみても、十人十色、自分には思いもよらない個性的な配色を見ることができて、それも楽しみの一つになっています。もちろん一番の楽しみは、気の置けない仲間達とおしゃべり...? (M.N.)

このツリーの制作を通して、ひとつひとつ丁寧に作っていくことで、最後にはきちんとした物が完成することを実感し、いつも手を省いてしまおうとする私も丁寧に作ることの大切さを強く感じました。正統なキルトを教えていただいて、自分の作品(パターンはみんな同じですが、布は自分で選べるので、より個性的なものが作れる)が作れるということがあります。(H.M.)

この会の良さは、同じパターンを使ってもそれぞれが自分の好きな布を選んで作るので、完成した時には、それぞれ個性的なものが出来ていて、とてもおもしろいし、お互いに、とてもいい刺激にもなっている、ということです。(H.M.)

全くの自己流で何となく好きな作品を作っていた私ですが、この会で講師の先生にパッチワーク キルトの基本から教えて頂いて、いくつも「目からウロコ」のような技術を習得できました。一人では中々進まない製作も、メンバーの皆さんと一緒にだと励みがでて、意欲もでてくるようです。このツリー・イン・ツリーは、定番のクリスマスカラー、グリーンとレッドから少しはみ出して、ブルーを基調で作ってみました。布選びの段階から、新鮮な気持ちで取り組みました。(M.F.)

上智大学ソフィア会公式ホームページ

発行: 上智大学ソフィア会

編集局: 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学ソフィア会事務局内

Tel: 03-3238-3041 Fax: 03-3238-3028

Copyright 1998-2008 Sophia Alumni Association | ソフィア会の個人情報保護方針